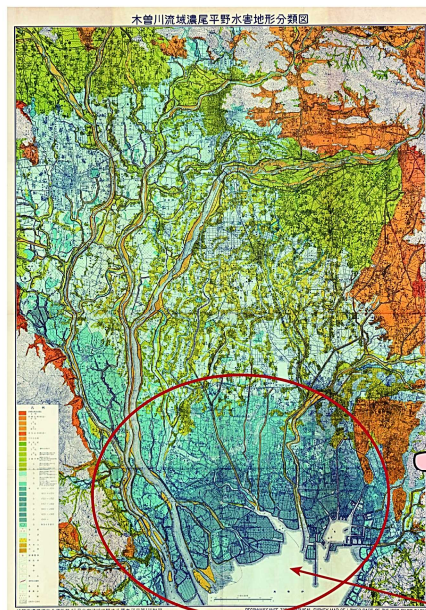


地図を防災に役立てる (2)

■地図は悪夢を知っていた

1959年（昭和34年）の伊勢湾台風では、東海地方を中心に河川の氾濫や高潮による浸水で死者・行方不明者5,000人以上という被害が発生しました。

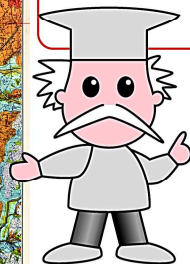
この災害については、災害が発生する以前の1956年に総理府資源調査会が実施した濃尾平野の水害地形分類調査における洪水危険予想区域と、台風による被害地域が一致したことから、当時、「地図は悪夢を知っていた（1959年10月、中部日本新聞）」と報じられました。



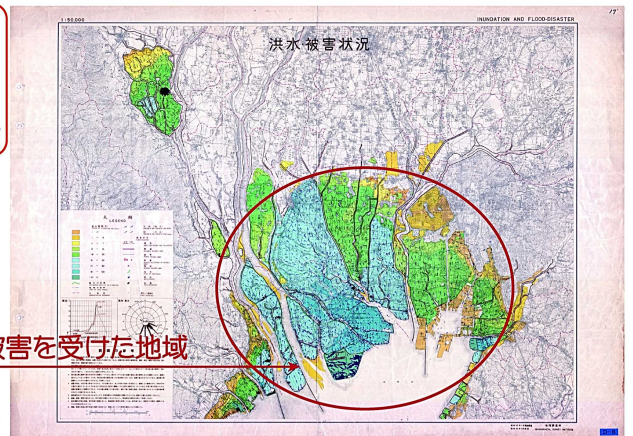
木曽川流域濃尾平野水害地形分類図（1956）
写真提供：（研）防災科学技術研究所 自然災害情報室

このことがあってから、災害による被害を少なくするために、事前に地形や土地の特性を調査することの重要性が知られるようになりました。

地域のことを知って
防災に生かすことが本当に
大事なんじゃないよ



実際に洪水の被害を受けた地域
洪水の危険が予想された地域



洪水被害状況図

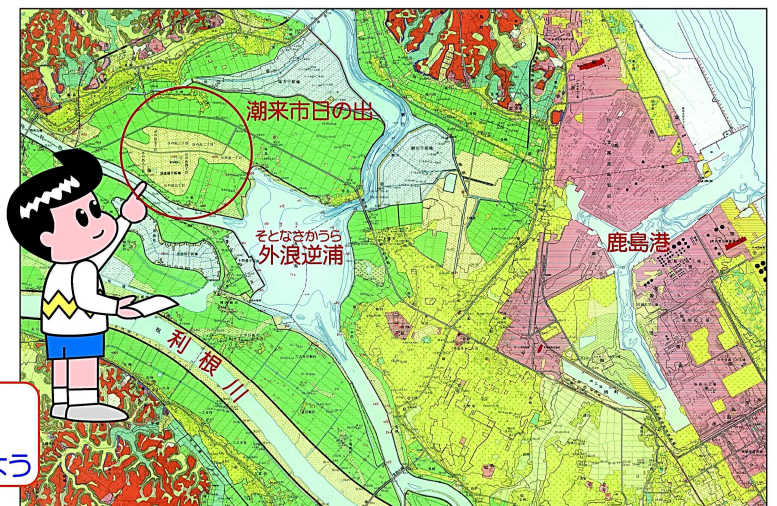
■土地の成り立ちを知って災害を想定しよう

2011年東北地方太平洋沖地震では、関東地方でも広い範囲で地盤の液状化が発生して、東京湾岸や利根川流域の低地や埋立地を中心に建物の倒壊、道路や地面の亀裂・陥没など大きな被害がありました。

液状化は海岸や軟弱な地層が堆積している旧河道・後背低地、比較的新しい人工的な埋立地などに発生しやすいといわれています。

その土地が、昔はどのような地形であったかを知ることで、災害の発生を想定することができます。

液状化被害が発生した
茨城県潮来市日の出地区を見よう



2万5千分1土地条件図「潮来」（縮小）

※液状化とは、水分を多く含んだ砂質の土地が地震の強い揺れによってドロドロの液体のようになり、地下水が砂とともに地表に噴き出てしまい、地盤が沈下や亀裂・陥没をおこす現象をいいます。